

森鷗外『ル・パルナス・アンビュラン』研究

—— ドラナチユウルの造形を中心に ——

鳥 内 あゆみ

はじめに

森鷗外は明治四二年一月、本格的に文壇復帰を果たして以後、次々に小説や翻訳作品を発表していくことになる。そのころ、日本の文壇では自然主義が隆盛を誇っていた。鷗外はゾラの名前を最初に日本に紹介した人物であり、本場の自然主義を理解していたこともあり、この自然主義の潮流とは距離を置いて活動していた。

そんな中、自然主義を諷刺した小説が文壇復帰の第二年の明治四三年六月、「中央公論」に発表された『ル・パルナス・アンビュラン』である。この小説が出来上がったのは鷗外の日記によると五月二二日であり、大逆事件直前の世相を反映して、自然主義への諷刺と同時に文芸弾圧を行う政府への批判も顔を覗かせている。

本論では、本文中に見られる諷刺表現を考察するとともに、『青年』『花子』など鷗外作品の表現との関連を論じる。『ル・パルナス・アンビュラン』の書かれた意図を論じる。また、登場人物ドラナチユウルの造形を考察する。本論文全体を通して、鷗外が自然主義全盛の文壇状況にどういった態度を示し、それが『ル・パルナス・アン

ビュラン』にどのように反映されているかを明らかにしたい。

一 鷗外初の諷刺小説としての試み

『ル・パルナス・アンビュラン』は自然主義への諷刺小説であり、大逆事件以前に書かれた作品であるため、政府に対してよりは文壇への諷刺が目立つ。ここで、作品前半でそれぞれの登場人物がどのように描写されているかを見てみよう。

・「シルクハット」

そして U.C. Delanature といふフランス人らしい名の男に、

「Arêtez-vous auprès de moi, Monsieur, s'il vous plaît」 と云

ふと (略) 残した名詞には Dr. Symbolicus, Dr. Mysticus, Dr.

Neoromanticus と書いてある。行列係は、此三人には余程傲慢

らしい態度で、「Die Herren Doktoren bitte ich, sich dem Zuge

anzuschliessen」と遣つ附けた。(略) 兎に角行列係の先生は、

るんな国の言葉は饒舌るのである。尤も間違つてゐるかも知れない。又長い事が云へるかどうだが、其辺は保障の限でない。

本章では後に触れる四人の「第一流の先生」と対応するように、

U. C. Delanature' Dr. Symbolicus' Dr. Mysticus' Dr.

Neoromanticus という四人の外国人の登場が登場する。彼らは日本の借り物の自然主義者たちと対比されているが、彼らに対し、行列をまとめる役のシルクハットはドラナチュウル（自然主義）以外には「傲慢」な態度を取っている。また、シルクハットはいろいろな言葉を話すことができるが、本当に使いこなせているわけではないらしいことがほめかされている。

・「門人」

両手で不調法らしく、白木に戒名を書いた位牌を擎げてゐる。

亡くなった先生には長男があるから、それが位牌を持つ筈であるが、先生が亡くなる前まで自由恋愛を遣つてゐたので、細君と三人の子供とは、別居をしてゐて、葬にも立たない。そこで門人のこの男が位牌を持つことになつたのである。

・「四句の偈の旗を持った人足」

自由恋愛はしてゐても、第一流の先生は余り経済が饒かではなかつたのであるし、それに平生やれ生の意義だの、生の受用だのとは云つてゐても、立派に生きるといふ程生きて見たのではなかつたのであるから、生滅滅已、寂滅為樂には相違ない。

・「第一流の先生」

死といふことは始終書いてゐたが、実はそんなに深く死といふものに就いて思索を費したのでもない。殊に自分の死といふことは少しも考へたことがなかつた。そこで遺言もない。（略）只平凡な死骸となつて、棺の中に仰向になつてゐるのである。

門人、四句の偈、先生の描写によつて、第一流の自然主義文学者である「第一流の先生」の実像が表されている。なぜ「先生」の位牌を持つのが門人なのかといえ、結婚してからも「自由恋愛」をしていたために、別居していた妻子は葬式にも来ないから、という生活の様子が明らかになる。しかし裕福だつたわけではなく、口で言つていたほど立派に生きたわけでもないことが、四句の偈の言葉になぞらえて表わされる。

次に、「先生」の仲間である「第一流の小説家」たちが登場する。

・「第一流の小説家」

シルクハットが一人に山高帽子が三人であるが、黒の洋服といふ所丈は揃つてゐる。尤も服の所有権に関しては、多少の疑を挟むべき余地がないでもない。棺の中に仰向けになつてゐる先生を除けて、日本の文壇で第一流と云はれる人は、此四人ばかりである。一步を進めて言へば、此棺と棺側とが即ち日本の文壇なのである。これが歩いてゐる文壇である。Parnasse ambulant である。

四人の「第一流の小説家」は、田山花袋ら、自然主義の大家を示している。と先行研究で指摘されている。黒の洋服はお揃いだが、「尤も服の所有権に関しては、多少の疑を挟むべき余地がないでもない」と、この四人の服している主義が自分たちのものではなく、借り物であるということを示し、シルクハットへの諷刺と通じるものとなっている。

・「批評家」

近眼目金を掛けた瘦男が先頭に立つてゐる。これが文壇の主義の名附親である。謂はゞfundateur d'ismである。文壇が内閣なら、これが書記官長である。跡に附いて列んだのは、皆訓練を受けた少壮者である。主義の違つたものなぞは交つてゐない。

先頭の男は島村抱月である。文中ではfundateur d'ism（主義の創設家）と表され、Parnasse ambulant（歩く文壇）と並べられる。この二つが文壇の中心といえるであろう。後につく若者たちは皆自然主義に服しており、作為よりも衝動を重んじる自然主義者に「訓練」という言葉を使うなど、皮肉な表現が見られる。

・「若い諸君」

色の着い痩せた二十前後の男がそろ／＼出て来て、列に這入つた。あらゆる種類の帽子が並ぶ。羽織は著てゐるのもゐないものもあるが、袴丈は皆穿いてゐる。その間々にいろんな学校の制服が交る。一年志願兵の軍服なんぞは交つてゐない。それは其

筈である。身体検査を受ければ、丁種になりさうなのが揃つてゐるのである。

若い自然主義の文学者たちである。「袴丈は皆穿いてゐる」という表現は、「第一流の先生」たちの「黒の洋服といふ所丈は揃つてゐる」という表現と対応したものとなっている。顔色が悪くひ弱そうな集団の様子は、好意的に書かれていゝとは言えないだろう。

・「並の会葬者」

数十人の人力車の列が、自然淘汰の方則の下に出来る。車上の人は、年寄もあれば若いもある。第二流以下の小説家、ismの違つた批評家、戯曲家、長詩家、短詩家なんぞである。その列は自然淘汰で出来ると云つたが（略）車夫と車夫との間に行われる自然淘汰を謂ふのである。何処かの停留所で電車から降りて、偶然載つた車の車夫の技量倆次第なのである。

人力車に乗つてゐる連中は、皆お人好しばかりで、シルクハットに何と云はれようが、自分が後にならうが、そんな事には頓着しない。不断から、書かせることは書かせて遣る、息の根丈は留めずに置いて遣る、第二流だと心得て書いてゐると申し渡されて、書いてゐる位なのだから、感覚が鈍つてゐるので、こんな時には扱ひ好いのである。

シルクハットが「跡は並の会葬者だ」と行つてしまつたあと、「第二流以下の小説家、ismの違つた批評家、戯曲家、長詩家、短詩家」の様子が描写される。自然主義以外は冷遇される状況を風刺してい

る。同時に、自分たちの文学者としての才能ではなく、「車夫と車夫との間に行われる自然淘汰」によつて順番が決まるという皮肉は、自然主義のみならず、どの主義に服するかでその文学者の地位が決まるという、文壇における党派全体を諷刺している。

・「異彩を放つた会葬者」

此男は馬に乗つてゐるのである。カアキイ色の軍服に大きい勳章を付けてゐるのは好いが、人力車の跡に就かうとして、人を載せた車と空車との間に挟まれて、馬はいれる。車夫は小言を言ふ。(略)とウ／＼騎馬の先生は空車の跡に廻つて附いて行く。「やあい、えらい人のくせに、あんな尻の方に附いて行かあ」と子供達が囁じている。

最後になつて登場するこの人物は、鷗外自身を表わしている。軍服に大きな勳章を付けているが、まごついて空車の後ろ、行列の最後尾に付いていく。そのことを子供達に揶揄されているが、唯一馬に乗っているという描写は、集団に染まらず、行列の他の人物との差別化がはかられているともいえるであろう。

後半では、天候にも恵まれ順調に進んでいた行列が紀尾井町まで来たところで異変が発生する。ドラナチユウルと「花子さん」がそこそ話している。「シルクハットは行列を指揮していたはずだが、二人の会話を「一しよ懸命に聞かうとしてゐるので、行列がどこを歩いてゐるか、一切知らずにゐた。」とドラナチユウルに気を取られ、行列の向かう先を見失っている。自然主義の支配する文壇が方

向性を見失つているともとれる表現である。

シルクハットがドラナチユウルの言葉が聞き取れたと思つた瞬間、ドラナチユウルは行列の先頭まで駆け出して行く。先程まで彼と話していた花子さんはうっとり陶酔しており、「魅せられたやうな、変な様子」をしているとシルクハットは気付く。本文中で初めてドラナチユウルの異常性が初めてはつきりと示されるのである。

(略)シルクハットは花の行列を駆け抜けようと思つてゐるのであるが、体は前屈みになつて看板のシルクハットが脱げさうになつて、氣ばかり探めて、足は一つ所を踏んでゐるやうな心持がしてゐるのである。

突然恐ろしい物音がした。今日は三二會堂で英国の大使が法会をするので、弔砲が鳴る筈ではあるが、それにもまだ少し早い。物音も大砲とは違つてゐる。なんだか「halei」と云つたやうである。人間の声であつたやうだ。いや、人間以上の声であつたやうだ。

この表現からは方向性を見失つた文壇の停滞が読み取れるのに続いて、「人間以上」のものの存在がほのめかされている。この「人間以上の声」によつて、行列全体に異変が起こる。

不思議にも行列がびたりと留まつた。(略)歩調の揃つた西洋人は揃つたまゝ、歩調のめちや／＼な日本人はめちや／＼なまま(略)何もかも凝り固まつたやうになつて、びたりと留つた

のである。

「人間以上の声」によって行列は動きを止められてしまう。ここでも、日本への諷刺が見られる。しかし、特に滑稽な描写をされているのが、これまでは行列の指導者であったシルクハットである。

最も可笑しいのはシルクハットである。体を前屈みにして、帽が脱げそうになって、飛行機なしに飛んで見ようとでもしてゐるような風をして、そのまま留まつてゐる。若しこれが彫刻なら、余程大胆な position である。地震国には不向きである。

その癖此シルクハットの先生は、精神が至極糙かである。「晴天白日にけしからん」、「不自然極まる」、「same に背いてゐる」、「第二流だ」、「自然の誤訳だ」、「消極的だ」、「形式ばかりだ」、「半無機物主義だ」といふやうな判断が、不規則不順序にシルクハットの下で湧き立つてゐる。

どうにかして動いて見ようと、気を揉んでも、足は磁石力で吸ひ附けられてゐるやうで、体は銅像にでもなつたやうで、ちつとも動かない。

前半の「第一流の先生」の描写で、すでに思想と行動の不一致があげつらわれていたが、ここでは行動を強制的に停止させられることによつて、その齟齬がよりはっきりと目立つことになつてしまう。ドナナチユウルによつてそれが暴露されてしまうとも言えるだろう。

二 『青年』『花子』との関わり

竹盛天雄氏の研究^三では、『青年』も鷗外の批判的精神が発揮されている作品であると指摘されている。そして、特に明治四三年六月に発表された『青年』(七)(八)の内容は、『ル・パルナス・アンビュラン』の諷刺内容と関連があるようである。

以下の文章は、第一章の最後に引用した、シルクハットが停止させられた場面の続きである。

歩けるには歩けるが、田の中をでも歩くやうに、足をたがひ違ひに引き抜くやうにしなくては歩けない。縛むすばは半分解けたのである。シルクハットは汗をたら／＼流して、半縛主義半因主義の歩き方を遣つてゐる。丁度驚のやうな歩き附である。

また、次の文章は、同じ月に「スバル」に発表された『青年』の純一と大村の会話である。

「哲学が幾度建設せられても、その度毎に破壊せられるやうに、新人も積極的になつて、何物かを建設したら、又その何物かに捕はれるのではないでせうか。」

「捕はれるのですとも。縄が新しくなると、当然当りどころが違ふから、縛むすを感じないのだらうと、僕は思つてゐるのです。」

「(略)僕はマアテルリンクを大抵読んで見ました。それから同じ学校にゐた友達だといふので、Verhaeren を読み始めたのです(略)あれには大分纏まつた人生観のやうなものがあるので

すね。妙にかう敬虔なやうな態度を取つてゐるのですね。丸で日本なぞで新人だと云つてゐる人達とは違つてゐるもんですから、へんな心持がしました。あなたの云ふ積極的の新人なのでせう。日本で消極的な事はかき書いてゐる新人の作を見ますと、縛られた繩を解いて行く処に、なる程と思ふ処がありますが、別に深く引き附けられるやうな感じはありません。あのフェルハアレンの詩なんぞを見ますと、(略)あの敬虔なやうな調子に引き寄せられてしまふのです。ロダンは友達ださうですが、丁度ロダンの彫刻なんぞも、同じ事だらうと思ふのです。(略)西洋で新人と云はれてゐる連中は、皆氣息の通つてゐる処があつて、それが日本の新人とは大分違つてゐるやうに思ふのです。(略)どうも日本の新人といふ人達は、拊石の云つたやうに、小さいのではありませんまいか。」

然としてかう云つた。あれは *Clique* の名なのです。」大村は恬然としてかう云つた。

同じ月に發表された二つの作品の内容が「自然主義」と「縛」に關するものであることは示唆的である。当時自然主義的な新しい価値観に彼ら自身がとられ始め、自然主義という党派自体がすでに形式化しつつあつたことを示しているのではないだろうか。

また、上に引用した『青年』純一の台詞も、これに關わる。『ル・パルナス・アンビュラン』の「歩いてゐる文壇」の停止の意味は、ここから読み取れるのではないだろうか。『青年』(八)で、純一は西洋の新人と日本の新人をはつきりと區別して考え始める。そして、日本の新人は「消極的」で「縛られた繩を解いて行く処に、なる程

と思ふ処がありますが、別に深く引き附けられるやうな感じはありません」拊石の云つたやうに、小さい」と、反対に西洋の新人は「纏まつた人生観」「氣息の通つてゐる処」があると認識されているのである。『ル・パルナス・アンビュラン』の「亡くなつた先生」が、作品は奇抜な内容を氣取つていたが、本人は思想にのつとつた生き方を必ずしもしていたわけではない、と第一章で既に述べたが、これは「亡くなつた先生」の「消極的の新人」としての在り方を示していたといえるだろう。また、日本の「棺側の先生(第一流の先生方)」と對比させられるように登場する四人の西洋人の、「どれもこれも葬に來ては葬に來たらしくして、にこにこ笑つたり、余計な事を饒舌つたりはしないのである。」という真摯な様子の描写も、純一の台詞の「積極的の新人」の「敬虔なやうな様子」を思い起こさせるものとなつてゐる。

清田文武氏は、鷗外の小説『杯』^五について「主義に対する主義にも、囚われた心の存すること」を指摘し、その立場から自然主義へ向かつたのが『ル・パルナス・アンビュラン』であると述べている。『青年』の「小さいのですとも。あれは *Clique* の名なのです。」という大村の言葉は示唆的である。この党派への諷刺という点でもこの二作品は通じているといえる。

次に、「積極的の新人」としてロダンの名前が出てくることに注目したい。鷗外はロダンに深い関心を持っており、『ル・パルナス・アンビュラン』の一カ月後の明治四三年七月、「三田文学」にロダンと日本人女優福原花子のエピソードを題材にした『花子』を發表している。『ル・パルナス・アンビュラン』に登場する「花子さん」はこれ

と同一人物とは言えないまでも、無関係ではないのではないだろうか。ちなみに、『涓滴』では『花子』は『ル・パルナス・アンビュラン』の前に置かれているので、単行本を通して読んでいくと『花子』の花子が『ル・パルナス・アンビュラン』の「花子さん」として再登場する形になる。

『ル・パルナス・アンビュラン』で、花子がどのように描写されているかを見てみよう。

書付を持ったシルクハットが、今迄にない優しい声で、「さあ、花子さん、あなたの番ですよ」と云ふと、ハンケチで顔を押しながら、廂髪の女が門の内から出て来て、棺の背後に佇んだ。

(略)但し折々ハンケチを顔から離れたところを見れば、花子さんは余り別品ではない……

「花子さん」は既婚者であった「亡くなった先生」が「自由恋愛」をしていた相手だが、「余り別品ではない」と評されている。小説『花子』でも、以下のように書かれている。

花子は別品ではないのである。(略)お三どんのやうだと云つては、可哀さうであらう。格別荒い為事をしたことはないと見えて、手足なんぞは荒れてゐない。併し十七の娘盛なのに、小間使としても少し受け取りにくい姿である。一言で評すれば、子守あがり位にしか、値踏が出来兼ねるのである。

小説『花子』は、「別品ではない」花子を日本人久保田は恥しる

が、その中に美のあることをロダンが発見する小説であるため、花子が「別品ではない」は小説中で重要な言葉となっている。『ル・パルナス・アンビュラン』ではドラナチユウルと花子が関わってから、ドラナチユウルの反乱が起こっているためである。

それまでにドラナチユウル君は頗に何か花子さんに囁いてゐたが、ハンケチを顔へ当てたり離れたりして歩いてゐた花子さんがいつの間にか妙にはしやいで来て、小声で何やら留めどなく饒舌り出した。もう手にはハンケチを持つてゐないのである。行列係をしてゐたシルクハットの先生は、大相気になる様子で、耳を翫て、聞かうとするが、ちき側で言つてゐるのがどうも好く聞えない。(略)一しよう懸命に聴かうとしてゐるので、行列がどこを歩いてゐるか、一切知らずにゐた。

花子さんはうつとりとなつたやうな工合で、少し大き過ぎる口の周囲に、夢を見てゐるやうな微笑を湛へて、noctambuleかなんぞのやうに、ふら／＼と歩いてゐて、今まで熱心に会話をしてゐた相手の突然あなくなつたのに、丸で気が附かないのである。

シルクハットは怪しい西洋人の駆け出すのを、口を大きく開いて、あつけに取られて見てゐたが、それでも花子さんの魅せられたやうな、変な様子には気が附いた。

先程見たように「消極的新人」である先生が亡くなって涙に暮れている花子さんが、「積極的新人」の要素を持つドラナチユウルに

話しかけられて「妙にはしやいで来て」、彼がいなくなっても気付かずに「魅せられたやうな、変な様子」をしているのである。この場面は、日本の「消極的新人」と西洋の「積極的新人」の違いを象徴的に示すとともに、「積極的新人」ロダダンに美を発見された『花子』の花子のパロディともとれる。

このシーンのあとに、シルクハットは駆け出したドラナチユウルを追うが、「恐ろしい物音」がして動きを停止させられる。

最も可笑しいのはシルクハットである。体を前屈みにして、帽が脱げさうになって、飛行機なしに飛んで見ようとでもしてゐるやうな風をして、そのまま留まつてゐる。若しこれが彫刻なら、余程大胆な position である。地震国には不向きである。

唐突に「彫刻」「銅像」という言葉も、彫刻家ロダダンが出てくる『花子』を思い起こさせる。更には、「地震国には不向きである」という付け足しまでされており、再び日本と西洋の違いを示すものとなっているのである。

『青年』を文脈として見たときに、ドラナチユウルがどういう意味を持つかを一度まとめておきたい。ドラナチユウルとシルクハットには、『青年』の大村と純一と同じモチーフが用いられている。

・『ル・バルナス・アンピユラン』

例の西洋人は、それを愛だとも思はない様子で、影の形に添ふやうに、同じ振調で附いて行く。二人は棺の直後の廂髪の傍ま

で来て、シルクハットが花子さんの左に並ぶと、ドラナチユウル君は心得顔に花子さんの右に並ぶのである。

シルクハットはふいと自分の体の動くのを感じた。花を持つてゐる人足は動かないのに、自分の体丈が動くのである。締めたとおつて、歩き出しさうにすると、平均を失つてあぶなく倒れる所であつた。(略) 縛おとどめは半分解けたのである。シルクハットは汗をたら／＼流して、半縛主義半因主義の歩き方を遣つてゐる。

黒い服を着た西洋人が一人先頭に立つてゐる。それが大股にゆづくり歩あくやうに見えてゐて、不思議に早い。すぐ跡を、道の向側に寄つて附いて来る、シルクハットの先生は一ししよう懸命に駆けつけて、やつと西洋人と自分との間に、同じ距離を保つてゐる……

・『青年』

大村が歩度を加減してゐるらしいので、純一はなる丈大股に歩かうとしてゐる。併し純一は、大村が無理をして縮める歩度は整つてゐるのに、自分の強ひて伸びようとする歩度は乱れ勝まさになるやうに感ずるのである。そしてそれが歩度はかりではない。只なんとなく大村といふ男の全体は均衡を保つてゐるのに、自分分は動揺してゐるやうに感ずるのである。

「歩調（歩度）」「大股」「平均（均衡）」という言葉に注目してみよう。『ル・パルナス・アンビュラン』では、ドラナチユウルはシルクハットに、「同じ歩調」で付いていつていた。シルクハットは二度目の停止から逃れて歩き出そうとするが安定しない。次に行列が進み出すと、ドラナチユウルは「大股にゆつくり歩くやうに見えて、不思議に早」く、シルクハットは必死で付いていつて、やっと「自分との間に、同じ距離を保っている」のである。

同じことが『青年』にもいえる。拊石の講演を聞いたことよつて純一に内面の混乱が訪れる。この日知り合つた大村を純一は直感的に頼りに思い、この場面でも「歩度を加減してゐるらしい」が「均衡を保つてゐる」ように感じる。一方、純一は「なる丈大股に歩かうとしてゐる」ものの、「自分の強ひて伸べようとする歩度は乱れ勝になるやうに感ずる」。大村が「新人とは何か」という新しい疑問を解決する助けの役割を果たすことは竹盛氏の研究^六で指摘されており、この章でもすでに『青年』の「新人」と『ル・パルナス・アンビュラン』について考察した。ドラナチユウルと大村、シルクハットと純一はそれぞれ重なるものとなっている。大村は純一の引率者としての性格を与えられているが、ドラナチユウルとシルクハットはその関係をパロディ化したものとなっている。このように登場人物を仔細に検討していけば、『ル・パルナス・アンビュラン』自体が同時期の鷗外作品のパロディとしての要素を持つといえるのではないだろうか。

ここまで、鷗外の小説中で自然主義、特に「消極的新人」を批判している部分について触れてきたが、鷗外と自然主義に関して述べ

ようとすれば明治四三年十月の創作集『涓滴』に触れる必要がある。『涓滴』は金子幸代氏によつて自然主義を意識して編集された単行本だという指摘^七がされている。

『涓滴』の最初に置かれた小説『杯』で、鷗外は「第八の娘」によつて自分を取り巻く文壇状況への宣言を行った。それはあくまで党派に偏らず、自分のやり方を貫いていくというものである。『ル・パルナス・アンビュラン』に「騎馬の先生」として出てくる鷗外を思い起こして欲しい。「騎馬の先生」は行列の後ろの方に付いていつていたが、それは、自分は自分として、党派からは距離を置いていつる様子を表しているともいえないだろうか。

『涓滴』の最後を締めくくるのが、序章でも述べたように『ル・パルナス・アンビュラン』である。鷗外はこの小説によつて文壇への批判を行っていることは明らかだが、「積極的新人」ドラナチユウルが「大股」でどこかへ消えたあと、「文壇万歳万々歳」という言葉で締めくくられている。

金子氏は『涓滴』によつて「反自然主義宣言」は締めくくられると述べているが、文壇への批判の意識をもつて編集された『涓滴』を通して見たときに、この言葉は示唆的である。自然主義への対抗は「文壇万歳万々歳」という言葉をもって終わるのである。『涓滴』が刊行されたすぐあとの明治四四年二月には次の創作集『烟塵』が刊行され、『フラスチエス』『食堂』などの小説によつて、鷗外の批判は政府へと向かつていく。

三 ドラナチユウル

第二章でドラナチユウルと『青年』の大村の関係について述べたが、この章では、更に見方を変えてドラナチユウルの人物造形の由来を考察していく。

現在のところ、ドラナチユウルの造形について具体的に述べられている研究はないが、論者は『ル・パルナス・アンビュラン』本文中に描かれているドラナチユウルの特徴付けと行動から考えて、『フラスチエス』の「引き廻しの人」と関連があると考えている。

ドラナチユウルは、最初はシルクハットの「影が形に添うやうに」付いて行くが、行列を操り出してから不思議に早く歩き、シルクハットも付いて行くのが大変なほどで、最終的には姿を消してしまふ。また、「悪魔」であることが暗示されている。外見は、濃い褐色の髪に切れ長の吊り目にびんと尖った八字髭、途中から（シルクハットが気付いた時には）目には「異様な光」が輝き出す。

『フラスチエス』は『ル・パルナス・アンビュラン』の三ヶ月後の明治四三年九月に書かれた対話編で、大逆事件後の行き過ぎた文芸弾圧を風刺した内容となっている。文芸弾圧に関する文士と官吏の対話が交わされた後、「引き廻しの人」が突然登場し、二人を罵倒して去る。以下に「引き廻しの人」の台詞の全文を引用し、特徴が書かれている部分に下線を引く。

引き廻しの人。(笠の如き麦藁帽を被り、長さ裸に達する鼠色の大引廻しを纏ひたる大男。短き髭鬚を繞りて、眼光炯々たり。いづくより来りしか、忽然一人の前に現れ、黙つて二人を睨む。

二人左右に尻餅を擣く。見苦しい奴等だ。己を誰だか知つてゐるかい。Heinrich Heine には影が形に副うやうに、一人の

Daemon が附いてゐた。其デモンが云ふにはな、昔ロオマの consul の従者に Ictor といふものがあつて、答の束の真中に鉞を立てた fauces といふ道具を持つてゐたが、自分も其従者の様に、お前の口で言ふことを、あとから実行して行くのだと云つたさうだ。己もデモンだ。やい。へる。へる。文士。己は貴様を見損つてこれ迄附いてゐたのだが、もうこれでお別れだぞ。見下げて果てた奴め。さつきからの物の言ひさまはなんだ。物識り振つて高慢な事を云ふかと思へば、自分で自分を打ち消して、遁げ腰になつてゐる。先覚者や革命家はあるまいと云はれて、へえ、ございませんと引き下がる。己が附いてゐて遣るのに、なぜ己が先駆者だと名告らないのだ。貴様の文芸生活と俗生活とは到底矛盾を免れないと、三宅雪嶺が云つたのは、けふ俺が別れるのを預言したやうなものだ。やい。役人。国家は貴様にオソリチイを与へてゐる。威力を与へてゐる。それはなんの爲めに与へてゐるのだと思ふんだ。己は執法者だから、己の頭腦で己が判決する。歴史にも構はない。世界の文化にも構はない。己の判決と違つた判決をすれば、それはそのした奴の間違ひだといふやうなことを云つてゐる。丸でロオマ法皇の infallibilities のやうな話だ。Godiamocci il Papato, che Dio ce Tha dato と、日本の芸術界がそれで恐れ入つてゐると思ふかい。威力は正義が行はれるために与へてゐるのだぞ。ちと学問や芸術を尊敬しろ。(堀端を大股に歩み去る。二人腰の抜けたるままにて見送る。)

『フラスチエス』の「引き廻しの人」は、自分でハイネに付いて

いたデモンと同じものだと言ふ、文士を「見損なつて」「影が形に副うやうに」付いて回つていたと言ふ。文士の官吏への態度に腹を立て、「もうこれでお別れだぞ」と別れを告げ、「大腿に歩み去る」。外見は、「笠の如き麦藁帽を被り、長さ踝に達する鼠色の大引廻しを纏ひたる大男。短き髭鬚を繞りて、眼光炯々たり。いづくより来りしか、忽然二人の前に現れ、黙つて二人を睨む。」と描写されている。

『フラスチエス』の「引き廻しの人」については、ハイネの『ドイツ・冬物語』からの影響がこれまでに指摘され、鷗外とハイネの關係については多く研究されている。ハ

以下に、『ドイツ・冬物語』第六章からの引用を示す。

ぼくはといえは、夜、机にむかうと／ときどき、うしろに／覆面をしたやつが／不気味に立つているのに気づいた。

男の姿はずんぐりしているようで、／目はふたつの光る星のようだった。／男は、ぼくが書いているのをじやましなかつた。／はなれて、しずかに立つているのだった。

ぼくは物思いにふけて通りをぶらついていた、／そのとき背後に、やつが／ぼくの影のようにつれてくるのを知つた。／そしてぼくが立ちどまるとやつも立ちどまつた。

なにかを待つように、立ちどまつた、／そして、ぼくが歩き出すと、／やつはまたついてきた。こうして、ついに、／ドーム広場のまんなかまでやつてきた。

ぼくがきみに出つくわすのは、いつもこんなときだ。／胸に時代感情がわき／精神の稲妻が頭を突きぬける／こんなときなのだ。

わたしはうまれつき行動的な人間です。／いつも無口でしずかにしています。／だけど、いいですが、あなたが頭で考えたこと／それをわたしは実行します、やつてのけます。

たとえ何年かかろうと、／わたしは、あなたが考えたことを／実現するまで休みはしません。／あなたは考へる、わたしは行動します。

あなたが判官、刑吏がわたし、／わたしは奴隸のように従順に／あなたの下した判決を実行するのです、／よしんば、まちがった判決でも。

むかし、ローマでは、／執政官のまえに斧がはこばれました。／あなたも自分の属吏をもっています、／しかし斧はあなたのうしろから、はこばれます。

わたしはあなたのリクトルです、／わたしは、キラキラ光る首斬り斧をもつて／たえず、あなたのあとを歩きます。わたしは／あなたの思想を実行するものです……

『ドイツ・冬物語』の「男」は、ソクラテスの「ダイモニオン」などが引き合いに出されており、そういつたものと近い存在であると思われる。夜、詩人である「ぼく」が机に向かっている（創作している）と不気味に後ろに立っている。また、「ぼく」の「影のよう」についてくる。「ぼく」の前には現れるのは「胸に時代感情がわき／精神の稲妻が頭を突きぬける」ときで、自分を「あなたのリクトルです」と名乗る。「ぼく」の思想を実行する役目である。マンツの下に斧のようなものをしるばせ、ずんぐりした姿に「二つの光る星のよう」な目をしている。

『フラスチエス』『ドイツ・冬物語』を通して見ることに、シルクハットに取り憑く「悪魔」としてのドラナチュウルの正体が明らかになる。『フラスチエス』ではデモンはもとと文士を「見損なつて」「影が形に副うやうに」付いて回っていたが、文士の官吏への態度に腹を立て、「もうこれでお別れだぞ」と別れを告げ、「大股に歩み去る」。これは、『ル・パルナス・アンビュラン』の最初はシルクハットの「影の形に添うように」付いていくが、途中でシルクハットから離れ、「大股」で歩いてついに姿を消してしまう筋立てと一致する。また、『ル・パルナス・アンビュラン』の「異様な目の光」と『フラスチエス』の「眼光炯々たり」というドラナチュウルクとデモンの表現も重なるものとなっている。また、これまでの研究によつて、鷗外はハイネに早い時期から関心を持っており、『フラスチエス』の「引き廻しの人」の造詣は『ドイツ冬物語』によつたことが明らかにされている。

また、これらの作品はそのテーマにおいても共通している。『ドイツ・冬物語』では「男」は「ぼく」の思想と行動を一致させるため

に働く存在として描かれた。それに対し『フラスチエス』では、「引き廻しの人」は自分もハイネのデモンと同じだということを表明し、「己は貴様を見損つてこれ迄附いてゐたのだが、もうこれでお別れだぞ。（略）己が附いてゐて遣るのに、なぜ己が先駆者だと名告らぬのだ。貴様の文芸生活と俗生活とは到底矛盾を免れないと、三宅雪嶺が云つたのは、けふ俺が別れるのを預言したやうなものだ。」と、清田氏の述べるように言行の不一致に怒り、文士のもとを去る。

おわりに

本論文で見たように、『ル・パルナス・アンビュラン』で、鷗外は日本の新人を否定的に捉え、「縛」を解かれても結局は停止に陥つてしまうという筋書きによつて、「亡くなつた先生」やシルクハットのように文学者の思想と行動の乖離している様子が描かれていると述べた。ハイネの「ぼく」に忠実な行動をするデモンとは逆に、ドラナチュウルクと「引き廻しの人」は反乱を起こす。それは、文壇の停止によつてもたらされるのである。『青年』で日本の「新人」を「消極的の新人」と区別したように、『ドイツ・冬物語』の「胸に時代感情がわき／精神の稲妻が頭を突きぬける」主人公とは違つて、「消極的の新人」は思想と行動が一致せず、積極的に何かを「建設」していく力が欠如している。それが『フラスチエス』で「引き廻しの人」であるデモンが文士から離れていった理由であるし、『ル・パルナス・アンビュラン』でシルクハットにびったり付いていつていたドラナチュウルクが方向性を見失つた彼を離れるだけではなく、立場を逆転させて逆に操ることさえ始め、最後にはどこかへ消えてしまう

『フラスチエス』の言葉を使えば「お別れ」する。理由であるといえるだろう。

このことから、『ル・パルナス・アンビュラン』のドラナチュウルの造形は、「引き廻しの人」の造形と共通する意図をもつてなされたといえる。もちろん、『ル・パルナス・アンビュラン』が書かれた時点では大逆事件の摘発は行われていないため、その時点で『フラスチエス』の案が出来ていたとは言えないが、アイディア自体はあったのではないだろうか。そして大逆事件をきっかけに、このアイディアを用いて『フラスチエス』という作品を書くことになったのではないだろうか。

『涓滴』を「文壇万歳万々歳」という言葉で締めくくった鷗外は、次の創作集『烟塵』では、『フラスチエス』『食堂』『沈黙の塔』などに見られるように、批判意識を大逆事件後の政府の文芸弾圧へ向けた。それは、シルクハットの「影」でいることをやめて姿を消したドラナチュウルが、『フラスチエス』の「文士」へととりつくことになったと言えるのではないだろうか。ドラナチュウルや「引き廻しの人」によって表わされる「デモン」のとする姿とその変化は、鷗外の批判意識のあらわれであり、変化であるということができよう。

一 明治三二年一月三日、「読売新聞」に発表した『小説論』による。

二 金子幸代「鷗外と〈女性〉―森鷗外論究―」（大東出版社、一九九二・十一）

三 竹盛天雄「鷗外 その紋様」（小沢書店、一九八四・七）

四 清田文武「鷗外文芸の研究 中年期篇」（有精堂、一九九一・一）

五 明治四三年一月、「三田文学」に発表。

六 注三に同じ。

七 注二に同じ。

八 伊東勉「森鷗外のハイネ傍註」（『文学』四〇、一九七二・十二）、清田文武「森鷗外とハイネリヒ・ハイネ―フラスチエス・『沈黙の塔』を中心に―」（『新潟大学教育学部紀要 人文・社会科学編』二二、一九七九）、一條正雄「森鷗外のハイネ受容について」（『岐阜大学教養部編』岐阜大学教養部研究報告』第二九号、一九九四・一）

九 ハイネ作、井上正蔵訳『ドイツ・冬物語』（井上正蔵編『世界文学大系七八 ハイネ』筑摩書房、一九六四・五）による。

一〇 『フラスチエス』で文士はオウイデイウスの詩を引き、自分たちの創作と行動とは違うのだということ官吏に訴えている。